広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

ランプシェードに「一珍」新たな価値創造

佐々木しず　広島県／陶芸家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠（たくみ）」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒット作品を手掛け、熊本県のPRキャラクター「くまモン」の生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第1回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募を合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪（東京）で行われたキックオフ・セッションを手始めに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか」「地域のオリジナリティーはあるか」「コンセプトやターゲットは明確か」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日、プレゼンテーションにて

作品をプレゼンする佐々木さん

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足掛かり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。広島県代表の匠、陶芸家・佐々木しずさんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

繊細な装飾をさりげなく

白くきめの細かい土を絞りながら陶器に凹凸のある模様を描いていく日本伝統の「一珍（いっちん）技法」。佐々木さんはこの技を生かした作品づくりに取り組んでいる。

「繊細な装飾をさりげなく施したシンプルで使いやすい器。そんなイメージを形にしようとした時、ふと頭に浮かんだのが一珍だった」と力強く語る。

白地にパール加工を施した虹色に輝く湯飲みなどの食器、縁や高台に銀彩を施した酒器、一輪挿し。「大切なのは個性」という信念で、佐々木さんならではの作品を精力的に生み出してきた。白い陶器の表面に銀と赤のラインを入れ、一珍で凹凸のある植物を描いた「銀赤彩真珠碗」は2010年、全国の陶芸家がご飯茶わん約600点を出品したコンテスト「めし碗（わん）グランプリ展」（実行委員会主催）の陶器部門で最優秀賞を受賞した。白い陶製の皿にあしらった銀彩がみずみずしい「銀彩一珍盛組皿」は11年に開かれた第63回広島県美展で工芸系大賞に選ばれている。

佐々木さんは1996年に鈴峯女子短大（広島市西区）に進学し、衣料化学科で学んだ。この頃、陶芸の世界に初めて触れたという。「呉市内で開かれていた陶芸教室に何げなく参加し、陶芸の魅力に取りつかれた」と笑顔で話す。

98年に短大を卒業し衣料系会社に就職したが03年に心機一転、陶芸家を目指して退職。その後、専門学校の岐阜県飛騨国際工芸学園（高山市）の陶芸コースに進み、卒業後は愛知県立瀬戸窯業高（瀬戸市）の陶芸専攻科に入学。徹底的に基礎を学んだ。

「瀬戸市では学校に通いながら製陶所で働いて学費を稼ぐとともに、絵付けなどの実技を磨いた。そこで一珍を知り、陶芸にどんどんのめり込んでいった」と振り返る。

思いを語る佐々木さん

銀彩を施した酒器

視点変え思い切って挑む

今回のプロジェクトで佐々木さんは陶製のランプシェード「SNAF（スナフ）」を制作した。シェードを一珍で装飾し、明かりをつければ特有の凹凸模様が浮かび上がる。明かりをつけない時でも存在感のあるインテリアになる。「照明というランプシェード本来の機能に、新たな価値を加えた」と力を込める。1月のプレゼンテーションでは一珍で波模様を描いた「F」と青いガラスでラインを入れたシンプルな「C」の2種類を発表。「どちらも瀬戸内海をイメージした」と解説する。

制作する上で、まずシェードのサイズに悩んだという。「奥行きが浅いと電球がシェードから露出するので明るいが、まぶしくて模様が見えにくい。逆に深いと暗く、照明としての機能が失われる。どちらを優先させるか迷った」と明かす。昨年10月に実施されたエリア・コンサルティングでサポートメンバーの下川氏に話すと「暗めの照明と考えればいい。逆に視点を変え、明かりとして使わない時も存在感があるようにしてみては」というアドバイスをもらった。「電球やソケットを合わせると高額になるためどうすればいいか相談すると『それに見合う価値のある作品に思い切って挑んでほしい』と言われ迷いが消えた」と表情を和らげる。Cは当初、青い色ガラスを陶器に七宝焼きのように焼き付けたものだったが、下川氏が「一珍のようにガラスの凹凸で装飾できないか」と提案。佐々木さんは「できるかも」とその場ですぐにガラス粉を水と混ぜ陶器に盛ってみたところ意外とうまく盛れた。「きっとできると思い、〝ガラス一珍〟を今回のゴールに据えた」。それから日々、ガラス一珍に挑んだ。ただ、何度試みても納得のいく作品にならなかったという。佐々木さんは、「技を磨くには時間が必要」と判断し、もう一つのアイデアに力を注いだ。陶器に溝を掘り、そこに細かく砕いた青いガラスを詰めて焼き付け、瀬戸内海をイメージしたラインを描いた。「一珍の複雑な凹凸模様と対照的な、納得のいくシンプルな作品ができた。ただ、今後もガラス一珍など独自性の高い作品には挑戦していく」と意欲を見せる。

このプロジェクトを通じ、佐々木さんは「全国の匠に出会い、モノづくりへの姿勢を知ることができたのは私にとって財産。視点を変えてみること、思い切って挑むことなど、今回培った全てを次の新たな創造への力にしたい」と力強く語る。

完成プロダクト「SNAF」の「F」

最新作は球体オブジェ

2009年に呉市警固屋で陶芸家としての活動をスタートした。「一珍に磨きをかけながら展示会への出品や個展開催に力を注いだ。16年には新しいアトリエ「atelier&galeria壱（いち）」をオープン。12月に、泡をテーマに曲線を刻んだ球体のオブジェ「うたかた」を発表した。「自分にとっての新たな試み。美しさや、はかなさ、緊張感、存在感を表現した」と目を輝かせる。

球体オブジェ「うたかた」

佐々木しず
広島県／陶芸家

何にも縛られない
自由な発想のデザイン。
それが、広島の陶芸だと思う。

1977年呉市生まれ。98年鈴峯女子短大衣料化学科を卒業後、イッセイミヤケに入社。2003年に退社し、岐阜県飛騨国際工芸学園陶芸コースを受講。06年愛知県立瀬戸窯業高陶芸専攻科を卒業。09年呉市に戻り作陶を始める。16年アトリエを同市音戸町に移し、5月にatelier&galeria壱をオープン。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT